

◎「世界知識」インタビュー要旨

(世界知識 2017 年 11 月 16 日号)

半生を昭和史に 生涯を記者として

日本の著名記者、米国問題専門家松尾文夫取材録

本誌記者 安剛

私の前にいるこの老人は松尾文夫(以下敬称略)という名だ。中国の読者はご存じないだろうが、日本では彼はよく知られており、ジャーナリスト精神を代表する人物だ。

松尾文夫は今年 84 歳、日本記者クラブは今年、年度大賞を松尾に授与し、日本の新聞業界の発展と日米関係の真相探求への貢献を表彰した。今回、松尾は北京大学米国研究センターの招きにより北京で講義を行った。新著「アメリカと中国」中国語版の出版準備のため訪中した。

松尾への取材は10月1日北京で行い、彼は国際関係学院の書物が積まれた事務室で英語と日本語を交えて静かに往事を語った。

松尾の家系は日本の昭和史と緊密な関係がある。祖父・松尾伝蔵は日本の第31代首相、海軍大将岡田啓介の義弟で政務秘書だったが、二・二六事件で青年将校らにより殺害されたのを始め、その一族には戦前・戦中にかけて、日本の敗戦に至るまでの歩みの中で登場する人物が多い。これが松尾文夫の政治外交問題に対する「距離の近さ」を生み、そのジャーナリストとしての活動の原点ともなっている。

松尾は1956年に学習院大学政経学部政治学科を卒業し、直ちに共同通信社に入社、64年には優れた業績によりワシントン支局に派遣され5年を過ごした。当時の米国は日本外交の絶対的な中心地であり、この5年間は世界が激変する5年だった。米国がベトナム戦争を始め、ニクソンが大統領となり、ソ連と東欧の「衛星国」の関係に激しい調整があり、インドネシアのスカルノ政権がスハルトにより倒され、中ソ関係は裂開へと進んだ。北大西洋から西太平洋まで、冷戦中の両陣営内部には重大な変化が生まれていた。

▼米中接近を予言

ワシントン駐在期間、松尾は国務省の東アジア・太平洋事務局を取材、交流する機会を得て、驚くべき収穫があった。米国国務省の「共産中国部」は部屋の設置や人員配置は「日本部」よりも大きく、中国部で働くスタッフの資質も日本部より高く、流暢な中国語を話し、中国に情熱を抱いていた。

松尾はこの事実によって、米国の中国への重視は日本を遥かに上回っていると感じた。1960年代の中国は米国の仮想敵国であったため、米国の「中国通」は実質的な仕事を奪われていたが、彼らの中国への「思い」は深く、彼らが養成した新「中国通」が中国と接触する機会をうかがっていた。

松尾は当時、東アジアや東南アジアで発生した地政学的変動から、自らの視野を米国の対日政策から東アジア全体へと広げ、日米関係と米中関係を連携して観察する必要を感じた。

松尾は各種の資料を閲覧し、国務省の若い職員の提案のもと、1949年8月に米国政府が編纂、発表した「米国の対中政策白書」(正式名「アメリカと中国の関係—1944年から1949年の時期に特化して」)を詳細に閲覧した。この1000ページに及ぶ白書は1844年の「米中望厦条約」から1949年の李宗仁のトルーマンへの書簡まで105年の米中関係が詳述され、蒋介石政権の腐敗と無能を批判、「米国は合理的な範囲で何をしようが、中国大陸が共産党に占領された結果を変えることはできない」「中国の現状は内因と外因のもたらすものだ」と証明しようとしていた。

「その国務省行きが自分の一生を変えた。『米国の対中政策白書』は私の見方に大きな影響を与えた」と松尾は語った。

その後の研究を通じて、松尾は米国と中国の関係の根源は日本との関係よりも深く、古いとの「感覚」を見出した。大きな歴史的角度からみて、米中関係は日米関係よりも重要であり、日本の命運は米中関係の動向とつながっていた。冷戦が最も厳しい時期でも、米国の対中政策は現実主義路線から離れることがなかった。いわゆる「アチソン・ライン」(1950年に発表した西太平洋の防衛線)は北朝鮮、台湾、沖縄などを含まれていなかった。

松尾は、米国と日本との関係が1853年のペリー総督の「砲艦外交」で始まったのに対して、米国と中国はその94年も前の1784年、ニューヨーク港から初めてインド洋を渡って広東に着いた貿易船「エンプレス・オブ・チャイナ」によって始まったという事実を重視すべきだと主張する。さらに重要なのは、明治維新を起点とする日本の第1次近代化の勃興は「全面的西洋化」だったが、主にドイツを学ぶ対象とし米国を疎かにしていた。米国を専門的に研究する初の学術機構は1924年になってようやく東京大学に設立されたが、「庚子賠款」の返却により清華大学が北京に設置されてから13年がたっており、中国清朝の留学生が米国に派遣されてから52年がたっていた。

松尾はこうして学者型の記者として成長し、米中関係に一層注目するようになった。米中がいつでも改善可能と判断し、特にベトナム戦争を集結させようとの対抗を收拾させようとしたニクソン政権誕生後には、ますますその確信を深めた。

1971年4月、松尾は「中央公論」に「ニクソンのアメリカと中国—そのしたたかなアプローチ」という文章を発表した。米ソ関係の情勢の変化、米国のインドシナ半島での影響力の減退や「ニクソン主義」の基本的内容の分析を通じて、米国が対中政策を調整している兆候や、米国政府当局者との接触から得た理解を羅列し、中国を「パワー・ポリティックスのパートナー」として手に入れる意識が米国に根を下ろし始めており、タカ派、ハト派、行政、与野党いずれもそうであり、「ニクソン政権が中国とのしたたかで実利主義に基づく外交接触を低く見積もるべきでない」と指摘した。

当時の日本は高度成長と強固な日米同盟という達成感に陶醉しており、世界の局面が根本的に変化しようとしていることに気が付かなかった。政界や学者、ジャーナリズムの「教条主義者」は松尾の予言を受け入れなかった。

その3カ月後の71年7月、キッシンジャーが秘密訪中、米中関係正常化の幕が開いた。ニクソンはカンサスシティで国際情勢について、米国、西欧、日本、ソ連、中国の「5つの力の競争」が世界

の前途を決めようとして発表した。

日本は衝撃の中で71年の夏を過ごし、対中政策の急速な調整に迫られた。松尾は「米中関係改善を正確に予言した第1人者」として日本の新聞史上に名を刻んだ。72年、松尾の初の著作「ニクソンのアメリカ」が出版され、80年には斎田一路と「ニクソン回想録」を翻訳出版した。

#### ▼「日米相互献花」で日本記者クラブ賞を受賞

72年から75年まで松尾はバンコク支局長に就任し、東南アジアでベトナム戦争の終結とインドシナ半島の歴史的変革を目撃した。81年にワシントン支局長として米国に戻り3年を過ごし、レーガン政権の第1期を観察報道した。帰国後は共同通信の関連会社の社長となり、同時に東大新聞研究所で客員講師を務めた。2002年、68歳の松尾はフリージャーナリストおよび歴史学者として活動を再開、東京に自らの事務所を設立し日米両国の新聞に評論や論文を発表、04年には「銃を持つ民主主義」を刊行、第52回日本エッセイストクラブ賞を受賞した。その後松尾はキッシンジャーの「中国を語る」を日本語に翻訳した。

改革開放後の中国は松尾に中国について深く研究するチャンスを生んだ。80年代以降、松尾は日中を15回往復、米中関係の発展の脈絡と歴史について積極的に探索するようになった。彼の細かいが大きな寓意を含む発見は多い。例えば長沙で毛沢東が米哲学者デューイの演説を聴いていたことを証明する材料を見つけた。1919～21年、デューイは中国を訪問し各地で演説し、教育問題や西側との交流、中国の想像力への認識、愛国主義などを語った。松尾の発見は、毛沢東とエドガー・スノーとの対談録と合わせ、中国革命の偉人が西側や米国の知識に欠けていたのではなく、その理解は早くから始まっていたと(松尾に)確信させた。また、新中国の指導層が建国後に出した最初の選択は、世界に対する冷静な分析に基づいた慎重な決定だったと確信させた。

老年に入り「人生第2の春」を始めた松尾は、戦争の和解を進めるために奔走した。何がそのように促したのかを聞くと、彼は「私は第2次大戦を自ら経験した最後の世代だ。3歳の時、軍人だった父親の駐屯で中国の山海関に行き、小学校6年のときに福井で空襲を経験した。戦争の恐怖が子供の記憶に染み付いており、記者になってからもインドシナ半島で戦争が人々に与える危害を目撃した」。松尾が戦争の和解に尽くすのは彼の家族が戦争のために多くを犠牲にし、また被るといふ痛ましい経験をしたためだ。

2017年、日本記者クラブ賞の授賞式で、松尾は「東アジアの和解のため、全力を尽くす。それが我々の世代の責任だ」と述べた。

松尾は、戦争の和解はまず日本と米国の間で行うことを主張し続けてきた。そこで彼は学術的立場を利用し、公開での文章や内部での提言で、「献花外交」を提起した。16年5月のオバマ大統領の広島訪問を呼びかけ、実現を促した1人だと彼は自負している。オバマはこの70数年間で広島を訪問した初の米大統領となった。

取材で松尾は「歴史の相似性」に何度か触れた。彼は歴史の車輪は前に進んでいるように見えるが、実は常に同じところで回っていると語った。歴史研究の中から規律を発見し、教訓を見出し、過去の負債を支払い、悲劇の再演を防ぐのが、歴史研究の意味だという。

「この種の考え方は中日関係には当てはまらないのだろうか」と聞くと、彼は「もちろんだ。これは私が歴史の和解を進めるもう1つの努力の方向だ」と答えた。

#### ▼次は重慶への献花を主張

2011年2月、松尾は「中央公論」に「歴史和解の不在が日本外交の躓きの石」という文章を発表した。この中で彼は、「今日日本と周辺各国の間の各種の外交課題は、日本が第2次大戦に対して賢明な締めくくりをしないまま経済大国の現実に陶醉してしまったためだ。中ロだけでなく、韓国や北朝鮮も日本の歴史の負債を償うよう求めている。60数年がたったが、日本はこの歴史に徹底的な清算をしていないことを人々は忘れることはできない。日本はしっかりした認識を持たねばならない。今やこの負債を償う時期であり、この角度から出発し、自らを反省する基礎の上に外交関係を改善する突破口を求める必要がある」と記した。(訳注:原文の表現と必ずしも一致しないが、本論全体の趣旨を紹介したもの)

「あなたは文章の中で『この負債をどう償うか』について詳細に書いていないが」と私は言った。「そうだ、私が強調したいのは態度の問題で、具体的な解決方法は両国政府と民間の密接な相互の関わりの中で探すべきだ」と松尾は答えた。

2012年秋、日本政府は中国の反対にも関わらず釣魚島を「購入」(訳注:原文の表記に従った)、当時の張志軍外務次官は10月28日の記者会見で松尾の文章を引用し、「私はこの(ベテラン)記者を知らないが、彼の観点には道理があると考え。いわゆる『歴史の負債を償う』ため、まずしなければいけないのが、日本が侵略拡張戦争で違法に獲得した他国領土を元の主人に返すことであり、古い負債を返さないうちに新たな負債を加えてはならない」と述べた。

この話を松尾に伝えると、松尾は笑ってこの話は聴いたことがあったが、張志軍の元の発言は読んだことがなかった、(私の発言の意図とは異なる文脈での引用だけでも、)自分の見方が中国の注意を引いたことはい、と語った。

15年8月6日、日本の学会は安倍晋三首相が行った戦後70周年の談話に声明を発表した。「日本国民にとって、日本が1931年から45年までに行った戦争は国際法に違反する侵略戦争であり、痛ましいことだった」「だが日本は侵略された側ではなく、中国、東南アジア、パール・ハーバーを攻撃し300万の国民が犠牲になったが、その数倍以上の他国民も犠牲となった。この戦争は大きな誤りであり、否定できない事実だ」と指摘。74人の学者の中に松尾も名を連ねた。

「あなたは安倍政権に対し、対中関係の処理で『献花外交』を行うよう提案を考えたことはないか」と訪ねると、松尾は「あるが、具体的な方策を提案したことはない」と語った。

「南京大虐殺記念館を訪問するのは？」と聞くと、松尾は「短期内でその可能性は大きくない、こ

の虐殺でどれだけの人が死んだのかは、日本国内で意見が分かれているからだ。私の意見としては、まず重慶を訪問すべきだろう。太平洋戦争中、日本軍は中国の戦時の首都だった重慶をたびたび爆撃し、巨大な多くの生命、財産に被害を与えた、この点は否定できない。重慶を選び、まずこれを一つの態度のきっかけとし、徐々に調整していけばよい」と答えた。

#### ▼中国人の智慧を信じる

私は松尾に、歴史認識問題は中日関係の健全で安定した発展の妨げになっている、中国人は日本に真剣に反省を求めている、中国政治、外交、社会文化の中で、真剣に反省し、歴史の負債を償う第1歩は、歴史を正視し、心から謝ることが必要で、中日には大きな隔たりがあり、真剣に向かい合う必要があると述べた。

私はさらに、次のように語った。今日の中国は中日関係に対する見方は十数年前と大きな変化があり、歴史問題は中日関係の唯一の問題ではなく、海洋領土問題、お互いの戦略的認識、政経分離なども含んでいる。今世紀に入り、中日の総合国力は歴史的な転換を迎え、歴史的に大部分の時期がそうだった「中強日弱」の状態に戻り、このことは両国の付き合い方に根本的に影響している。長期的角度から見て、中日関係が戦略互惠の正常な軌道に戻るかは、一方的な選択で決められることなく、すべてを地域の戦略的環境の変化から作り出せるものでもなく、双方向の選択の問題だと述べた。そして中日関係の今後の最大の試練は、双方がどのような発展の途を選択するかであり、両国政府と民衆がどのようにお互いを認識するかにあると述べた。

松尾はこれに対し、1971年4月「中央公論」に米国の対中政策が変化すると予測を発表して以来、半世紀近くの間、中国に天地がひっくり返るような変化が起き、巨大な成功を収め、多くの方面で日本を追い越し、それは様々な細部に及ぶだろうと語った。さらに、あらゆる国には自らの特徴とかつての曲折があり、日本と中国が歴史から教訓を学ぶ能力はどちらが強どどちらが弱いということはないと信じていると語った。そしてグローバル化の時代、日本と中国は同じ船に乗っており、それは選択が不可能で、お互いを再び敵とすることはできない。歴史は悠久であり、近代の苦痛は日中の交流の一時期であり、中国の発展の道や中国人の智慧は信頼に値する、まさに1949年の「米国の対中政策白書」の末尾にあるように「答えは時間の中にあるのかもしれない」と語った。(翻訳: 古畑康雄)